



JR 小山駅東口前のクリスマスイルミネーション。

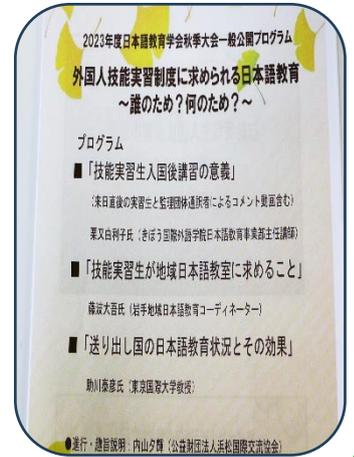
企画・編集 澁谷 健司 / 栗又 由利子

12月に入りました。今年は記録的な暑さが続き秋を感じる間もないままに、気が付けば年の瀬を迎えようとしています。早いもので新型コロナウイルスの大流行からまもなく3年。我が国の外国人訪問者数は順調な伸びを見せました。来年は技能実習制度に代わる新制度の開始等、更なる変革が予想されますが、当校はこれまで同様「日本語に不慣れな外国人が、現場で日本人とともに活躍するために何が必要なのか？」を常に念頭に置いて、日本語教育に取り組んでいきたいと考えております。1年間大変お世話になりました。来る令和6年もどうぞ宜しくお願いいたします。

あじけんスコープ 番外編 ～日本語教育学会秋季大会参加レポート～

今月のあじけんスコープは、番外編として、去る11月25日(土)に山形市で行われた日本語教育学会秋季全国大会にて、当校主任講師の栗又より、一般公開プログラムのパネリストとして、技能実習生の日本語指導について発表してきた模様を下記の通りレポートさせていただきます。

『今回、私は日本語教育学会からの依頼を受け「外国人技能実習制度に求められる日本語教育～誰のため？何のため？～」というタイトルのもと、3名のパネリストと共に講演を行いました。私は「技能実習生入国後講習の意義」というテーマで、当校がどんな目的を持ち、どんな点を重視して日本語教育を行っているのかを発表しました。発表では、実習生の開始時、修了時の会話テストの様子や、実習生の日本語学習に対する生の声を動画で紹介しました。この学会は、主に日本語教育を専門としている大学の教授や、留学生への日本語教育を専門とする日本語教師が参加しているため、当校の技能実習に特化した実践的な教育内容、教育方法は非常に目新しいものに映ったようで、発表終了後は、たくさんの質問を頂きました。また、これから日本で増えると思われる「就労者としての外国人」への日本語教育のヒントとなったというようなお声掛けも頂き、非常にうれしく思いました。今後も、実習生の日本での安全で、充実した生活のために日々研究していきたいと思っております。』



大会要項

今月の実習生

Aye Nanda Kyaw (ナンダー) 先生 →

今月は、昼休みに、スマホを利用して定期的に母国の日本語の先生とコンタクトをとっているミャンマー人実習生の皆さんをご紹介します。この日は現地の先生から「日本の天気や、食べ物に慣れましたか？」等、日本の生活を気遣う言葉が掛けられていました。来日直後の実習生の皆さんにとって、現地の送り出し機関からこのような手厚い継続指導が受けられる実習生は本当に恵まれていると思います。「日本に来てからもミャンマーの先生と色々話ができて安心です。」と、実習生の皆さんもとても嬉しそうでした。

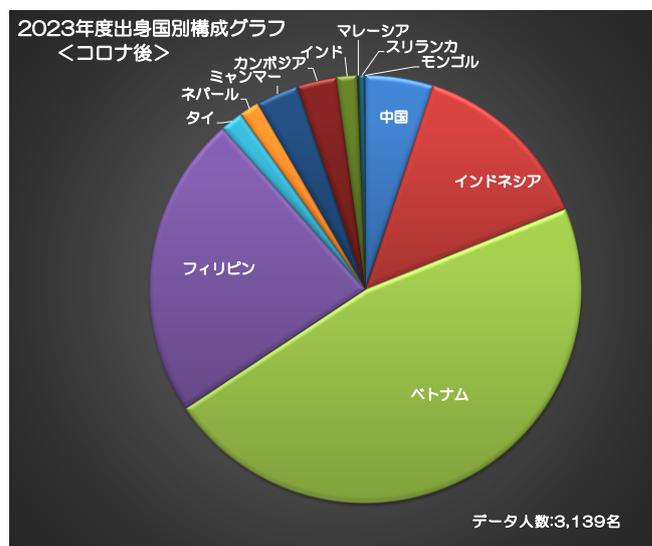
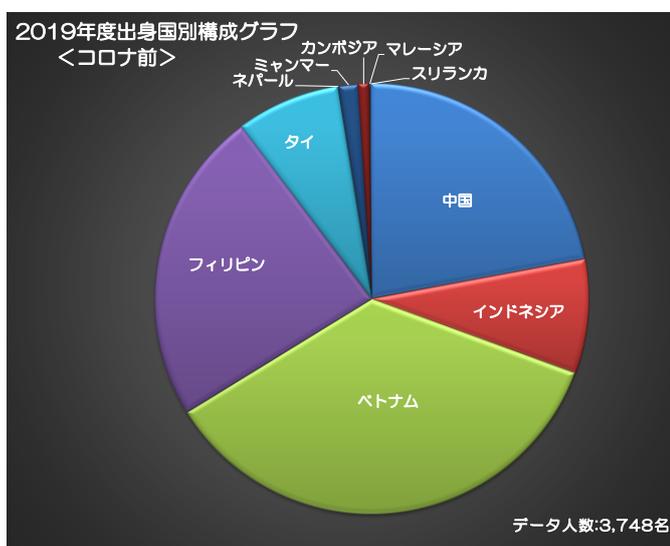


あじけん流日本語授業

～コロナ以前・以後の実習生受入の動向レポート～

今年新型コロナウイルスの感染拡大が収束し、1年間を通していわゆるコロナ以前と変わらない教育活動を展開することができました。そこで、今回コロナ前の2019年と今年2023年の当校における実習生の皆さんの動向を、①来日実習生の出身国別構成、②日本語講習修了会話テストの成績という2つの観点から比較してみました。その結果、下記グラフの通り出身国別比較データからは、コロナ前後で中国人実習生の来日数が大幅に減ったこと、また修了会話テスト成績比較データからは、コロナ前後で特に大きな変化は見られないことが分かりました。

<出身国構成比較データ>



<修了会話テスト成績比較データ>

